



東京都写真美術館

開館 15 周年記念 カフェ・プロジェクト

期間： 2010 年 5 月 15 日（土）～ 8 月 29 日（日）

第1期 5月15日(土)～6月11日(金) | 第2期 6月12日(土)～7月25日(日) | 第3期 7月27日(火)～8月29日(日)

会場： 東京都写真美術館 2・3 階ロビー 入場無料

主催： 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

協力： NEC ディスプレイソリューションズ株式会社／株式会社キクチ科学研究所

第 2 期 Bプログラム「映像人類学特集」

6/17, 18, 24, 25, 7/1, 2, 8, 9, 15, 16, 22, 23

夜間開館日（木・金） 18：30～20：00

※7/16（金）のみ、上映時間が16:30-18:00となります。

「映像人類学特集」 川瀬慈氏・企画協力（約 80 分）

映像人類学者の川瀬慈氏の協力により、美術館では紹介される機会の少ない気鋭の日本人研究者による作品を上映します。7/16（金）には、出品作家である、映像人類学研究者・分藤大翼氏を招きトークを行います。

企画概要

映像人類学は映画制作を通して、特定の文化事象を記録し、理解することを要としてきた。異文化社会において、レンズの前で生起する、まなざし、ふるまい、気配、痕跡等、複雑な諸力のスリリングな働きを、長期間にわたる現地調査のなかで培った感性と、人類学的な知見や配慮のもとに共奏させ、映画として紡ぎ出すのである。本企画では、それぞれエチオピア、カメルーン、インドネシアにおいて撮影された3作品を紹介する。

[川瀬慈・映像人類学]

上映プログラム

- 1) 川瀬慈 《ラリベロッチー - 終わりなき祝福を生きる - 》2005 年 / 30 分 / DV
- 2) 村尾静二 《老いの時空》2008 年 / 30 分 / HDV
- 3) 分藤大翼 《Jengi》2008 年 / 20 分 / DV

ゲスト・トーク

7/16（金） 18：30～20：00

分藤大翼氏（映像人類学者・信州大学准教授）

1) 《ラリベロッチ-終わりなき祝福を生きる-》

エチオピア高原北部を広範に移動する“ラリベロッチ”と呼ばれる唄い手たちは、早朝に家の軒先で唄い、乞い、金や食物を受け取ると、その見返りとして人々に祝詞を与え、次の家へと去っていく。ラリベロッチのこうした活動は、警女(ごぜ)や春駒など、農作物の豊穰や家族の平穏を祈って各地を回ったという、わが国の門付(かどづけ)芸能者や、托鉢の僧侶の姿を思い起こさせる。

ラリベロッチは、唄うことを止めるとコマタ(アムハラ語でハンセン氏病の意)を患うという差別的な言説のもと、謎に満ちた集団として人々のあいだで語られてきた。本作は、ラリベロッチの老夫妻が、エチオピア北部の古都ゴンダールにおいて行った活動を記録した。ラリベロッチは、近所の住人たちに家々の主の名前、宗教、職業、家族構成等の情報をあらかじめ取材し、歌詞の内容へと反映させていく。そして金品などの喜捨を受け取ると、祝福の台詞をその人物や家族へ捧げ、次の家へと移動する。ラリベロッチに対する人々の反応は一律ではない。そこからは、親しみ、侮蔑、羞恥など人々の様々な感情が伺える。ラリベロッチ側も、たとえ人々に拒絶されても決してひるまず、絶妙なジョークによってその活動を正当化しつつ、人々の彼らに対する好意的な反応から邪険な対応にいたるまでユーモラスに歌唱にとりこんでゆく。芸能を生み出す根源的な力がエチオピアの路上に生きている。

川瀬慈(かわせいし)

アフリカの音楽・芸能の映像記録に従事。2008年『Room 11, Ethiopia Hotel』が、サルデーニャ国際民族誌映画祭において(最も革新的な映画賞)を受賞。2009年、英国王立人類学協会民族誌映画祭審査委員。現在、日本学術振興会海外特別研究員としてマンチェスター大学グラナダ映像人類学センターに所属、映像人類学理事会 www.cva-ruaes.com メンバー。フィルモグラフィ www.itsushikawase.com

2) 《老いの時空 (flame of life/aging in Bali)》 民族誌映画

《老いの時空》は、インドネシア共和国バリ州内陸部の農村にて生活を営む老人の日常を捉えたものである。主人公はときに韓国客にむけて、ときに地元社会の儀礼のなかで影絵人形を操る。その職業は「ダラン dalang」とよばれる。ダランは、影絵人形の物語の外枠となる宗教的世界観や物語を通して語られる道徳や慣習(アダット)を熟知し、芸術的素養に恵まれていなければならない。また、影絵の比喻に倣うなら、現実を光に照らしただけではなく、闇の領域への洞察が遅くなければならない。宗教、慣習、そして芸術が生活世界の規範であるといわれる当該社会において、主人公はどのような「老い」を生きているのか。ここには「老い」にまつわる様々な問題-からだ(身体技法)、社会的地位、知識、技術、伝承、超越など-が含まれている。

本作品はインドネシア、バリ島で暮らす老人とその生活に焦点を当て、撮影を主とした調査を通して当該社会における「老い」の在り方を捉え直そうとしたものである。さらに、このように撮影された映像を当該社会においてワークショップ形式で上映し、当事者を交え、映像を通じた通文化的な議論を重ねることにより、「老い」とその意味を多角的に問い直すことを目的としている。

村尾静二(むらおせいじ)

村尾静二(むらおせいじ)

総合研究大学院大学助教。立教大学兼任講師、慶應義塾大学非常勤講師。専門は映像人類学、映画学、文化人類学。インドネシアにおいて宗教と身体を対象としたフィールドワークを続けている。共著書に『映像人類学の冒険』(伊藤俊治・港千尋編、せりか書房、1999年)、『映画は世界を記録する-ドキュメンタリー再考』(村山匡一郎編、森話社、2006年)、共編著書に『現代映画作家を知る 20の<方法>』(フィルムアート社、1997年)など。

3) 《 Jengi 》

アフリカ大陸の中西部、カメルーン共和国東部州の熱帯雨林にはバカ (Baka) という狩猟採集民が暮らしている。バカ族はピグミーとも呼ばれる「森の民」の一つのグループであり、優れた音楽文化を持つ人々として世界的によく知られている。

人々は森には数多くの精霊が存在すると考えており、なかでも「ジェンギ (jengi)」という精霊を最も大切にしている。男性によってジェンギを守るための集団、「結社」が組織されており、ほとんどの男性は少年期に儀礼を受けて結社に加入する。ジェンギ結社への加入儀礼は、集落のそばに作られたンジャンガという場所で行われる。ンジャンガは森の奥から来たジェンギが滞在する聖域であり、結社員以外は立ち入ることができない場所である。結社員は加入儀礼の過程で明かされるジェンギの秘密を「守る」ことで、ジェンギによって、森で遭遇するあらゆる危険や病から「守られる」とされている。

本作品は、バカ族の語りをもとに、人々がジェンギ結社への加入儀礼を執りおこなう様子や、ジェンギの登場する歌と踊りを開催する様子を描いている。そして、人々の言動から、バカ族にとってジェンギとは何なのかということを明らかにしようとしている。人類学的な調査に基づいて制作された記録性の高い作品であり、民族誌映画 (ethnographic film) とも呼ばれる映像人類学的な作品であるといえる。

分藤大翼 (ぶんどうだいすけ)

1996年よりカメルーン共和国の熱帯雨林地域に暮らすBakaという狩猟採集民の調査研究を行っている。2002年より調査集落において記録映画の制作を開始。主な著作は『森と人の共存世界』、『見る、撮る、魅せるアジア・アフリカ！ー映像人類学の新天地ー』。ブログ『Poche Verte ~緑のポケット~』でアフリカに関する情報を発信している。現在、信州大学全学教育機構・准教授。